

映画『ファンタジア』とクラシック音楽

学部二年生ポスター研究発表

はじめに

ディズニーゾートの創立者であるウォルト・ディズニー(Walt Disney, 1901-1966)は、パークだけではなく数々の映画作品も残してきた。1940年に公開された映画『ファンタジア』は、彼の映画のなかでも特に独創的で、130人以上のオーケストラが演奏するクラシックの名曲とアニメーションが融合した作品である。一つのコンサートに参加しているような感覚になれる作品ともいえるだろう。ディズニーは今まで以上に音楽に力を注ぎ、当時『オーケストラの少女』などの映画で知られていた指揮者レオポルト・ストコフスキー(Leopold Stokowski, 1882-1977)やハリウッドの音楽家たち11人と共に音楽を作り上げた。それらの音楽を映画のバックに用い、8曲のクラシック作品から7つの物語からなるセリフのないアニメーション映画を作り出した。また、音楽だけではなく映画館で聴き手が音楽を耳にする環境にもこだわった。世界ではじめてステレオ再生方式が世界で一般的に導入され実用化もされた。複数のスピーカーからそれぞれ異なる音を出すことでより立体的に感じる事が出来るようになった。

そこで、ディズニーの作品、クラシック音楽とアニメーション映像の融合『ファンタジア』の全7章で流れるクラシック音楽についてアニメーションの内容と共に見ていきたい。

1. J.S.バッハ(ストコフスキー編曲)/ 《トッカータとフーガ》ニ短調BWV.565

《トッカータとフーガ》は教会のオルガンで演奏されるために作られたが、『ファンタジア』で使われたのはストコフスキーによるオーケストラ編曲版だった。ストコフスキーのオーケストラ編曲はクラシックの世界では「際物」扱いられていることもあってあまり聞か演奏されておらず、バッハのオリジナルを愛好する評論家からは必ずしも喜ばれたわけではなかった。

次に《トッカータとフーガ》に合わせたアニメーションを見ていきたい。トッカータの部分は指揮者とオーケストラ楽団員のシルエットのみで表現されている。更にフーガの部分はいくつもの旋律が複雑に絡み合っていくのをディズニーをはじめ、アニメーターたちもこのことを強く意識していた。そのためフーガからは、弦楽器の弓の動きが星の動きで表現され、ハーモニーの変化によってオーロラや夜空の色の変化で表現され、幻想的な世界感に切り替わる。



2. チャイコフスキー/バレエ組曲 《くるみ割り人形》作品71Aより

《くるみ割り人形》では、通常の演奏では冒頭は《少序曲》と《行進曲》が演奏されるが『ファンタジア』では、この2曲を除く6つの曲が使われている。また、『ファンタジア』で使われているバレエ組曲と演奏会で演奏される曲順が異なっている。

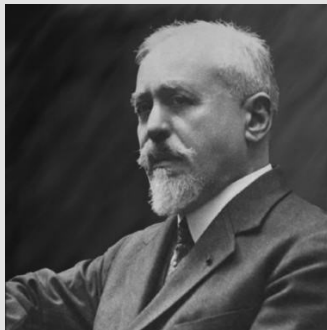
更に、《こんべい糖の踊り》や《トレパーク》のストコフスキーによる演奏では、様々な編曲が所々施されている。この作品のアニメーションは、楽曲の世界観を大地の幻想的な映像美で描いている。1曲目に比べ、沢山の可愛らしいキャラクターや色彩が多く使われているのも特徴といえる。



3. デュカス/交響詩《魔法使いの弟子》

デュカスの《魔法使いの弟子》には魔法使いに弟子入りしたミッキーマウスが登場し、ストーリー性も出てくる。このアニメーションは一番早く制作が開始された作品だ。緩急のついた音楽と、デュカスによるストーリー性の強い曲調がウォルトに強く影響を与え、さらに演奏する楽団や指揮者もこだわるようになり1年をかけた完成された。そこで、新たな試みとして「作品を音楽コンサートのようにする」という考えのちに、ディズニーが予てから構想していた「芸術」の塊、ファンタジアが誕生する先駆けになった作品だ。

この原曲の物語は元々、ドイツ人の詩人であるヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテによる「魔法使いの弟子 Der Zauberlehrling」フランス語版に着想を得たとされている。



4. ストラヴィンスキー/バレエ音楽《春の祭典》

20世紀ロシアの作曲家イーゴル・ストラヴィンスキーの《春の祭典》の抜粋が用いられている。このアニメーションは、タイトルからは想像できない程壮大な宇宙のストーリーになっており、地球の誕生から始まり、大地が生まれゆく姿や時代によって変わる様々な生物、そして滅びゆく大地と生命など迫力のある演奏と共に表現されている。

1938年9月の会議では同じストラヴィンスキー作曲による《火の鳥》を使うことが提案されていた。しかし、アニメーション作品とさらに結合させるため「前史時代をテーマにした何かをするための曲が書かれている曲はないだろうか」とウォルトは尋ねた。すると《春の祭典》が提案され、レコードを聴きウォルトは「これは素晴らしい！前史時代の動物にはぴったりだ」と喜んでくれた。(Taylor, 1924, P236)

5. ベートーヴェン/交響曲第6番 《田園》へ長調作品68

交響曲《田園》は、用いられている作品の中でもひととき有名な作品で、5つの楽章にもそれぞれタイトルがあり、表題性の強い作品として知られている。『ファンタジア』では、神殿を舞台にユニコーンやケンタウロス、天使などが登場し、まるでギリシャ神話のようなストーリーになっており、ファンタジアでもそれぞれの楽章にもタイトルがつけられている。



この作品も当初は《田園》ではなく、フランスの作曲家ガブリエル・ピエルネによるバレエ音楽《シダリスと放羊神》という曲が考えられていた。しかし、様々な絵のアイデアを実際に作品として作りあげていく過程で音楽が合わないということになり《田園》が使われた。

6. ポンキエルリ/歌劇《ジヨコンダ》から 《時の踊り》

ファンタジアの中でも特に明るい印象が強い《時の踊り》は、元々《ジヨコンダ》というオペラの一部に使われていたバレエシーンの音楽だが、オペラとしてはほとんど演奏されなくなり、このバレエ音楽だけが、コンサート用の小品として演奏されるようになった。

アニメーションは、バレエダンサーに見立てた沢山の動物たちが踊るストーリーになっている。バレエを踊っているのが優雅で穏やかな印象を与える。

- アニメーションは
- ①ダチョウの踊り: 朝
 - ②カバの踊り: 午後
 - ③像の踊り: 夕方
 - ④ワニの踊り: 夜

の4つの場面に分かれている。多数のステップで構成されているバレエに基づき、バレエを現実的に表現しながらも、そしてユーモラスな映像に仕立てた作品だ。

7. ムソルグスキー/交響詩 《はげ山の一夜》 8. シューベルト/《アヴェ・マリア》D.839

『ファンタジア』の最後は、正反対の2つの曲が使われている。《はげ山の一夜》は非宗教的、《アヴェ・マリア》は宗教的な趣を持っている。《はげ山の一夜》は、リムスキー＝ニコラエフによる編曲版が有名だが、ここではリムスキーによるオーケストレーション版が用いられている。

アニメーションは、鋭角にとがった山に住む魔王が目覚め、麓にある町を自分の手で悪に染めてしまう。遂には町の死者までも墓地から呼び起こし魔王の力によって魔物の姿に変えられてしまう。しかし、夜明けとともに魔物は幽霊に戻り、朝日が昇ってきてしまう。ここで《アヴェ・マリア》に曲が変わり、死者たちを祀る巡礼者たちの幻想的なアニメーションが描かれている。

おわりに

『ファンタジア』は、製作期間は3年とされており、当時のコンピュータなど無い時代に人だけで制作されたアニメーション作品として、史上最も手間をかけた作品とも言われている。アニメーションに合う音楽に非常にこだわりの、そして力を注ぎ、かつて無い作品を作り上げようとしていた。

しかし、1940年11月13日にニューヨークのブロードウェイ・シアターで封切されたが、当時の評価は低いものだった。雑誌が特集を組んだが、映画扱いされることはなく、音楽欄で作品が論評されていた。また、アニメーションの中で用いられた曲に対して、「アニメーションが作品本来のイメージとはかけ離れている」という批判が集中した。更に、従来からのディズニー映画のファンですらこの作品に戸惑いを見せたとされている。加えて、この作品を上映するのに必要な装置にかかる費用が莫大だったため、上映可能な映画館が非常に限られてしまった。しかし、ウォルトは、インタビューで「これは私が死んでからもずっと楽しんでもらえる作品だ」とコメントしている。事実、ウォルトが亡くなって3年後に再上映されて以来、評価が高まり、1940年度のアカデミー賞では、ウォルトとストコフスキーが特別賞を受賞している。後の2000年、『ファンタジア』の続編として『ファンタジア 2000』が制作された。上映時間は75分で前回の作品よりも短くまとめられ、各曲には明確なストーリーが加味されたため、子供にも理解しやすい作品となった。